慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マックス・ベーア著 重農主義研究
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.8 (1940. 8) ,p.1161(143)- 1168(150)
JaLC DOI	10.14991/001.19400801-0143
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400801-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シェパード・バンクロフト・クロウ著「フランス國民經濟史（一七八九年―一九三九年）」　一四二　（一一六〇）

とく多少遺憾の點があるとはいへ、同國經濟政策の史的研究書として本書は見るべき一書たるを失はぬであらう。

（丸善定價一七圓五〇錢）

――一九四〇・七・三〇――

マックス・ベーア著『重農主義研究』

高橋誠一郎

一

本書の主題は大革命以前に於ける佛蘭西思想の一部を形成するものであるが、而も此の著は教義的には吾人が本誌昭和十三年十一月號（第三十二卷第十一號）に於いて紹介せる同一著者の一千九百三十八年の著『第十三世紀より第十八世紀中葉に至る初期英國經濟學』の續篇であつて、是れ等の兩卷は互に相補足するものであると著者は述べてゐる。（M. Beer, An Inquiry into Physiocracy, 1939, p. 5.）。著者の所言の如く、是れ迄重農主義を主題とせる英米經濟書の存在頗る寥々たるの事實は吾人をして意外の感を懷かしむるものがある。一千八百九十七年に出版せられたヘンリー・ヒッグスの『重農主義者』（The Physiocrats. Six Lectures on the French Economistes of the 18th Century.）を除いては、之れを主題とせる單行の論篇は一つも存することがない。然も、本書の著者を以つて觀れば、ヒッグス氏の著は『國富論』第四編第九章に於けるアダム・スミスの「農業主義」若しくは「エコノミスツ」即ち重農主義者に關する論述以上に多く出づることなきものである。固より重農主義を取扱ひつゝある佛蘭西經濟文獻は英米の其れに比して遙かに豐富ではあるが、然しながら、同じく著者の言を以つてすれば、其の孰れのものと

雖も、前掲『國富論』中の一章以上の內容を含有することなきものである。(ibid., pp. 5-6.)。

斯くて重農主義に關する英米人の知識は、猶ほ依然として、這般の學說を奉ずる者が農業を以つて富の唯一の泉源と看做し、又工業を以つて不生產的と認めたと云ふ見解、更らに、ケネーが、其の曖昧模棱なるが爲めに是れ迄多數の聰明なる智者を困惑せしめたる『經濟表』を制作したと云ふ意見のみに限られてゐる。彼れ等は斯くの如くして、廣大なる知識、廣汎なる人生の經驗及び鮮明なる思想を有する人々より成る重農主義者等が如何にして又何が故に斯くの如き見解を有し、而して彼れ等の反對者によつて擧示せられた論證と明白なる事實の總べてに對して是れ等のものを擁護したかに關しては猶ほ依然として無知識である。然らば、重農主義の意味は何であるか。其の教義的諸泉源と其の興隆の諸原因とは何であつたか。其の企圖及び目的は何であつたか。本書の取扱はんとする所のものは實に這般の諸問題である。(ibid., p. 6.)。

此の書の著者にシェル(G. Schelle)の『デュ・ポン・ヴ・ヌムール』(Du Pont de Nemours et l'École physiocratique, 1888.)を借與し、彼れがシェル以上に遙かに優れたる著作を行ふ可きことを信ずる旨を書き送つて之れを激勵せる者は、實に當時八十八歲の老儒ジェームズ・ボナー(Dr. James Bonar)であり、著者自身は彼れが本書の最後の章を草したる昨年八月を以つて第七十五回の誕生日を過したる高齡の著作家である。老學者の意氣亦旺んなりと言ふ可きである。

二

著者の意見に據れば、重農學派は經濟的及び倫理的の二原因より發生せるものである。重農主義は重商主義よりの反動、社會學的に言へば第十七世紀に於いて佛蘭西に起つた產業革命よりの反動である。フランスワ・ケネーを頭領とせる斯學派の指導者等は工業時代以前に復歸せんことを努めつゝあるの觀あるものである。彼れ等は土地階級の利益の代表者たるの觀あるものであつて、特にルイ十四世朝の前半に於いてコルベールによつて施行せられ而して其の後繼者等によつて續行せられた重商主義的政策に對抗するものである。彼れ等は主として重商主義に基く政策及び制限を以つて、經濟生活の倫理的基礎、即ち、人と人、州と州、國民と國民との間に、是れ等のものを相互に分離する政治的境界に關することなくして商取引を支配す可き交換の平等、公正の價格若しくは交換上の正義と矛盾するものであると觀る。彼れ等は(一)經濟的には、人民の主要なる職業として農耕に復歸するに於いて、(二)倫理的には、通商貿易に干涉する政治的施設の總べてを廢止するによつて自然的正義及び自由を回復するに於いて、換言すれば、自然をして神の攝理によつて之れに與へられたる其の固有の諸法則に從つて支配するに委せしむるに於いて(physeikratia—自然の支配)、有效なる救濟策を發見したと信じたのである。(ibid., p. 15.)。

重農主義は其の主要なる特徵の示すが如く、撞着せる諸見解と矛盾せる諸教理の合成物として現るゝものであつて、最も近代的なる諸學說と全然中世的なる其れとを連結しつゝあるものである。斯くて彼れ等は或る者によつては革命主義者、階級打破論者として、他の者によつてはブールヂュワ的改革家、放任的自由主義者として、最後には反動主義者、封建的夢想家として取扱はれる。英國人の眼には、重農主義がトーリイ主義と所謂「コブデン主義」との混成產物として映ずることも亦尤もである。著者は、重農主義發生の事情、及び更らに小なる程度に於いて、トーリイ黨の自由貿易主義發生の事情に對する系統的研究によつて、恐らくは問題の解決に赴くを得可きものと思惟したのである。(ibid., pp. 16-18.)。

著者は先づ、英國に於いては、第十四世紀末以來、土地階級が條例及び因襲によつて農產物の輸出に對して課せ

られて居つた制限の廢棄を要求せることを叙し、次いで、佛蘭西に於いては、穀物の自由貿易は單に暫時の間のみ繼續したのであるが、勅令若しくは布告中に表明せられた穀物の國内交易に對する制限が一千七百六十四年に至る迄、即ち英國に於けるよりも百年長く持續せるの事實を説き、而して穀物貿易の自由の範圍を擴張せるアンリ四世の治世が農民の記憶中には長く農耕の黄金時代として殘存し、恰も羅馬人が正義の地上に行はれたる時代としてサッルヌスの治世を云々するの習ひなるが如く、重農主義者等が常にアンリ四世及びスュリ公爵に關説する旨を述べる。（ibid., pp. 22-26.）。

而も、ベーアは佛蘭西重商主義の勃興がアンリ四世の御宇に始まるものであり、之れを定式化せる者が彼れの輔弼の名臣の一人たる商務總監バールテルミ・ヅ・ラッフェマス（Barthélemy de Laffemas）であつた事實を指摘して、佛國重商主義の論述に移り、第十六世紀に於ける經濟狀態より始めて、ラッフェマス及び商務院　アントアン・ヅ・モンクレチアン、ジャン・バチィスト・コルベールとルイ十四世に就いて述べ、最後に、自然への復歸運動の興起に及ぶ。次いで、著者は自然法經濟學を論じ、希臘・羅馬及び基督教會の教旨、アリストテレース及びトーマス・アクイナスの交換論、アクイナスの外國貿易論、自然的職業・價値及び價格論、スコラ哲學者及びロックの財産論に就いて述べる。著者の見に從へば、重農主義者はズトア哲學者及び基督教よりして世界主義的觀望を、アリストテレース及びアクイナスよりして交換・價格及び貿易に關する見解を、又財産並びに生命・自由及び財産を擁護する民政社會の興起に關するロックの推理を受け容れたものである。（ibid., p. 72.）。

三

第四章に於いて重農主義の先驅が論ぜられる。著者は先づ同學説に對する英國の寄與を叙し、農業の損害に於いて工業に恩惠を與ふる重商主義的政策に對すると等しく穀物貿易の制限に對する反對が英國土地階級中に其の發生を見たるものであり、國富の眞正唯一の泉源は土地であつて、工業ではないと云ふ意見が發生したのは彼れ等の間に於いてゞあり、又、完全なる貿易の自由が最初に提唱せられたのも、彼れ等の間に於いてゞあつたことを述べる。而して著者は特に重農主義の經濟的萌芽として一千六百七十六年に出版せられた匿名氏の Reasons for a Limited Exportation of Wool. 中の數行を引用してゐる。（ibid., p. 74.）。次いで、社會批評家としてのフェヌロン及びケネーの先蹤たるボアギルベールが論ぜられる。第五編はフランスワ・ケネーを主題とするものであつて、彼れをして經濟學に赴かしめたる雰圍氣、其の傳記、著作、彼れとボアギルベール及びアダム・スミスとの比較、並びに彼れの社會原理に就いて述べ、ケネーは個人として觀れば、ロックと共に一個の近世的倫理哲學者であるが、社會人として觀れば、即ち經濟學及び社會の統治に關しては、アクイナスと一致するものであつて、一個の中世神學者であり、スコラ哲學者であつたと結語する。（ibid., p. 114.）。

第六編に於いては生産的及び不生産的勞働、農業及び工業、商業及び貿易、貨幣及び貿易差額、利率、課稅、賃銀等に項を分つて、ケネーの經濟學を論述し、第七編に於いて、更らに之れを括約する。著者に從へば、ケネーの經濟的概念を批評的檢討の下に置かんとするの學は恐らく妥當ならざるものであらう。先づ第一に、彼れは彼れ自ら這般の檢討を行へるが故に、其の諸教理に對して提起せられ若しくは能く提起せられ得可き總べての反對論を充分に知覺して居つた。第二に、經濟學の諸原理により、若しくは第十八世紀の後半以後常に吾人に知れ渡つて居る産業的發達によつて吟味せられる時、重農主義經濟學の不確實を暴露するが爲めには何等重みある知識的努力を要することがない。社會的使命を有する經濟學者を取扱ふに際しては、批評家の主たる考察は、彼れ等の信條、教義若し

くは推理の或るものゝ弱點を暴露するに存することを得ずして、其の理想的制度の要點を發見し、彼れ等をして多少意識的に彼れ等の時代の外に踏み出し而して過去を回顧するか若しくは更らに彼れ等の意見と一致する所多き將來を構想せしむる原因又は理由を探求するに存しなければならぬ。著者ベーアは、重農主義研究に際して逢着する難件及び不調和の總べては、第十六世紀以後に於ける哲學及び自然科學の進歩に照して中世經濟生活を合理化せんとするの企圖として之れを考察したならば、除去せらる可きものであると思惟する。敬虔なる基督教徒として又倫理經濟學者として、彼れの時代の社會生活に不滿を感じ、而して彼れを圍繞せる倫理的及び知識的影響によつて動さるゝ所のあつたケネーは、中世社會を回顧し而して是れを以つて近世的社會よりも倫理的に更らに鞏固なる基礎を有するものと觀たのである。然しながら、彼れは又、交換上の正義即ち交換の平等を確保するが爲めに制定せられた中世的規制の總べてが其の目的を達成することが出來なかつた事實をも觀たのである。加之、彼れは重商主義が交換の不平等即ち有利なる支拂の差額を獲得するが爲めに其の規制を使用して、其の目的を達成せることを知つた。彼れは又、自然法の自然科學的解釋によつて、自然科學的諸法則は必然因果關係的連續に於いて作用するを以つて、自利心は制壓せらるゝこと能はざることをも亦學んだ。是に於いて乎、當事者の一方に他の者以上の利益を與ふる商業的規制の總べてを除去するが爲めに自然及び正理をして自由に作用せしむることが最善であつた。（ibid., pp. 144-148.）。

第八編は「重農主義的王國」と題せられてゐる。ケネーの意見に從へば、最善なる政治形態は、主權を附與せらるゝも而も自然の諸法則及び是れ等のものより誘導せられたる成法と一致して行動する單一の權威である。斯くの如き政體を構成するが爲めには、有形及び無形の自然法に於いて人民を教導することが必要である。斯くの如きは王國の善良なる統治と經濟的繁榮の缺く可らざる條件である。生產、分配及び交換は斯くして自然的正義に從つて進行するであらう。而して『經濟表』は實に重農主義的王國の經濟を解說するものである。斯くて著者は『經濟表』に說明を施し、而して最後に、ケネーの生涯の最後の二十箇年間に於ける主たる努力が、舊き中世的社會よりも更らに大なる永續性と卓越性とを有す可き新たなる中世的社會を再創設するに在つたものと認める。最後の第九編は『重農學派』と題せられ、先づケネーに對するアダム・スミスの評價より始めて、筆を岐路に馳せ、ケネー、スミス及びリカードオの地代論を考察し、本題に復歸して重農學派を論じ、ミラボー侯爵、ル・メルシエ・ヅ・ラ・リヴィエール、デュポン・ヅ・ヌムール、アベ・ボードー、ルトローン等ケネーの學徒に就いて簡單なる叙述を試みる。而して、著者はケネー及び其の學徒の偉大を以つて、其の上に英國經濟學者等が彼れ等の經濟學を建設せる人類一般の共同一致の原理を再建せるの事實に存するものと觀る。此の見地よりして重農主義者等は經濟學の開路者たる其の稱號に値するものである。（ibid., pp. 188-189.）。

四

著者ベーアは自己の重農主義に對して下したる解釋の獨創的なることを主張し、彼れは之れに關係ある僅かに二個の觀察を發見せるに過ぎずと稱してゐる。一はケネーの想念を以つて「封建的ユートピア」として特性附けたるロメニイの所言であり、（Louis de et Charles de Loménie, Les Mirabeau. Nouvelles études sur la société française au XVIIIe siècle, 1879-91, tome ii. ch. 1.）。他は「重農主義の純經濟的諸學說は實に中世經濟の死後の理論と看做さる可きものである」と言へるブリーフス博士の其れである。（Dr. G. Briefs, Untersuchungen zur klassischen Nationalökonomie. Mit besonderer Berücksicht. d. Problems d. Durchschnittsprofitrate, 1915, S. 20-22.）。洵に

著者はケネーの主たる努力を以つて「新中世社會」の再建に在りと觀るの點に於いて其の獨創を主張し得るものである。然しながら、斯くの如き解釋が果して一般經濟思想家の承認を受け得可きか如何かは固より大なる疑問である。又、吾人は重農主義の社會的含意の分析が夙に『餘剰價値學說史』によつて其の「重農主義者の體系の一般的性質」中に試みられた所であり、（Theorien über den Mehrwert, I Bd, 4 Aufl., 1921, S. 33-49.）、而して同主義を以つて一定特殊の政治的目的の合理化と觀るの傾向が輓近著しく增加しつゝあるの事實をも認めなければならぬ。（cf., Norman J. Ware, The Physiocrats: A Study in Economic Rationalisation,——American Economic Review, vol. xxi, pp. 607-19.）。重農主義に對する考察が『國富論』以後に於いて殆んど進歩する所なしと觀、自己の研究の卓越を誇るに於いて、本書の著者は聊か夜郎自大の嫌ひなきを得ざるが如くである。

吾人は齡將さに喜壽に垂んたる著者が意氣益々軒昂、筆力愈々勁健なるを衷心よりして慶賀すると共に、其の近業が彼れの往年の好著『英國社會主義史』に比して著しく低調たるの感なきを得ざるを深く遺憾とする。人をして漫ろに强弩の末力を歎ぜしむることなく、更らに其の晩年を飾る可き深邃なる研究を以つて學界を惠まれんことを切望して吾人は此の紹介文を終る。

（四六判一九六頁、丸善書店賣價金五圓七拾錢）。

岸本誠二郎教授著「價格の理論」

千種義人

一

我々の經濟行爲は常に價格を中心として營まれてゐる。自由主義經濟の時代は云はずもがな、統制經濟の時代においてすら、尙價格は人の經濟行爲の原動力であり、ひいては一國家、或は全世界の經濟現象を規制するものである。

それ故に、經濟學が成立してから今日に至るまで、價格の理論は經濟學の中心問題を構成し、この理論を完成しようとする企てが常に續けられて來たのである。周知のやうに、アダム・スミス、リカード、ミル等の古典學派は、價格を主として生產費の側、即ち供給の側から說明して來た。之に對して、メンガー、ボェーム・バヴェルク、ジェボンス、クラーク等の限界效用學派は、效用、即ち需要の側をも價格決定の要因にとり入れ、之によつて價格を需要供給の兩面から說明するやうになつたのである。所が一財の價格は單にその財に對する需要供給によつて決せられるものでない。それは他の總ての財に對する需要供給と密接に關聯して決せられる。それ故、單純なる需要供給說はこゝに退却を餘儀なくされ、之に代つて總ての財の價格は一般均衡において同時に決定されるといふ「一般均